

復旦書齋錄

明治四十二年六月下浣起筆

特別
14
1919
240



38- 9052

遊魚を於録

以四十二年六月下旬起

〇友人久須美衣三郎の友人翠平清と遊し畫
 と海邊山華山に之をふとある画行一紙を存す
 以若久須美此の画行を車多く持ち寄し未だ
 本り此の画一見するを得ず画行を以て
 美流画と認めしむるに於て其の趣を施し
 七少うすは是れも華山此の画を以て晩年
 可なりと感ずるに思ふる各家に華山

の葉を入んたる痕ありし或と華山別苑の
物くきくべししと教くはるものありしと
のを園し更なる谷正をてくものありし
しと元日んばきうくもの興味ありし
りるありし一家を昔らんきうくもの
ありし輪廓の像をひき園と田を隔て
く山あり山林集に村ありし物とありし
おカ子の千々石一し橋ありしたる
の樹木ありし人家隠見す然れども
考へると云ひ流石に献物のかたを
てくものありし

試みし園しと示したるもの極めたる
八月行とありし華山の事と云へし
の画の頃昂騰して小舟掛大の
得るきりありしと云へし又
物とありし跡とありしと云へし
てこしと云へし此の画の真蹟と
サラス池)

○前四候音家の圖書の書名も
記ありし書録本三代格ありし
名け前し海帯ありしものありし

本等一うしと是くも而もるも著るるを是利
尊氏書言田のちのぬけ河等の自中へ傳
歌集をうす、このちと高野のちの河境のちの
うしと拾遺公今の五葉のちと拾遺獲るる
公の古歌歌味の一斑のちと

一 大寶積經

大寶積經摩訶薩會帳、康永三年足利尊氏
輯録する所の歌集とて昔の寶積經要と
書す是くも先き尊氏書、南と釋迦佛
全身舍利の教説を得、乃ち其説と題し

詠を時人、木の以て地を成り、凡そ集中、収
る所のよの光の元は御詠二首のち、尊氏直義
各十二首、乃ち乃ち各二首、有靴廣香、行珍
行春和文、道成春、文運、文性、五の河、各
五首、重義、顯文、頼喜、貞頼、運智、各三首、高
靴、淨辨、各二首、賢俊、師直、清胤、各一首、行各
一首、あゝ詠る二十八人、歌計る三十一首、皆自
ちのち係り、而して皆而の所文、之直義、殊不
(明瞭) 尊氏の之、順次之と書し、直義、跋と依り
り書成り、や尊氏之と高野山、等別院、のち

金剛院亦以之を寶とし歴世相承して徳川氏の
初に及ぶなり

南の利孝も多く古本を蒐めたる是に於て人をし
無到院を諭し寺領三方石を寄附しと以て之
を獲んとするより志を先付けめたる寺領終る道
皆んせり其故於吉公の時と違ひ多し到院款
敷し而して修築の資も乏し寺領乃ち相謀り
て是書を前田氏に售りて以て其資を得んこと
を欲し人を以て分り給ふ公終る之を購ひ了償
金三万枚時元禄五年なり金三万枚を即ち

金二千五百兩なりとありて存て来三十一万石
を辨せしめし給ふ未償を標準とし之を算せ
ハ今の五万石に該あり公の書を辨せしむる
と考へては幾多斯の如きものありしなり

本書縦一尺四分厚寸三十一折表紙金泥の佛
書ありし挿棧摸する所の紙又初め其のしと並義
の書次の五行を疎石の書終りの二行と尊氏の
書と傳ふ詠歌四首淨衆、五段、度思、頓河
各自かゝる書ありし所也

今四冊版すらんは、杉書に傳ふを此書と名ふ

又親の能くする珍敷のの一部を言三郎とて揮
のし直し即ち前不校其半とて之を彦行の孫
とて考證也

○此以某氏の半切山左之跡を辨め伊三郎の
半切を偽ひて之を以て換物とてし是し其
又門下を辨るは其の偽とて之の偽を以て之を
成す之を之を之を以て之を以て之を以て之を
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
の由半とて換物とて之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

んハ井上候が三遊亭田相と其くたるもの也其の
由田相自らも之を以て其の者ありて之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
其の者ありて之を以て之を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を

○今も早稲田出版部のため出版物(既約)
の一案も三つ三つ支那歴史と興味をお
もはるる店々後々々々目的を以て之を以て
部類の書書を順と進め出版し所謂

通傳廿四史と作ることを漢林軍海義
軍海義三國志のおもむきなりと
出ししことある誰れもあらざるも二十四
史と見え漢義ありしことと人の見え
す又國書も多くとて此もやうと傳へしは
もあるなりこれを傳へしことと見え
而も其事也此の史の歴史と漢と力
の漸く失せ、早う力ありとも見え
骨をあらしむるのあらざるをうら
平もあらざるも其味ある軍海
書

きつもの、乳き、葉とて、廿四史の大意
を知らしむるも、時身ある中、すうの
とまふなり、勿論此の史、漢書とて、
味あり、初巻とて、なるは、しるす
論廿四史、介とて、しるす、
因り、初巻とて、漢書、
言ふ、さうけ、り、大体、
会得し、得る、り、
あり、出級とて、あり、

圖書刊行會第二期規約

- 一 圖書刊行會第二期の規約を滿二年とし四月十二年十月より始り明治四十四年九月に終る
- 一 一ヶ月の刊行紙数を月刊約一千二百頁とせしめ洋装二冊に仕立て毎月十日より廿五日迄の可なり
- 一 會場を京都に設けしむ
- 一 別紙臨時會表に據り月報及誌名本を一定し二年間決して變更せしむ
- 一 明治十二年十月十五日を以て會場募集の切切とし其後募集ありしものを臨時會と

流す

- 一 明治四十二年十月より翌年を開始す
- 一 出資額を五千圓と定め明治四十二年七月二十日迄に吉川正七、林總一郎、お伊藤、坂本、早川純三、卯の四人より全額を支出し之を三書及出資金取組の印を預めたる事
- 一 会費募集集款を三千圓と定め出資金の四割を支拂す
- 一 何れも不足を生じしと認めし出資者者連帯し其不足を以て出資金を増加する事

- 一 出資者の明治集款より用ひたる金約二千圓)と四十二年十月より十五年の間に月別を以て出資あり、償却し残額(約二千圓)ハ亦二部終結に振込みあり
- 一 吉川良平、文、会計ノ監査を委嘱せしむ
- 一 収入金と支出金とを毎々記帳し印を預入す
- 一 早川純三、早川正七、坂本の代り編輯主任を委嘱し、早川正七、坂本を主任とし、早川純三、坂本を副主任とし、現七、七、七

一 支拂お切平より女より平川地より山内河内車
印を要す

一 二ヶ月ある決算を行ひ利益を三令し又一を
積立金とし其二を出資ある交付の但最前の二
回の換金とする

一 積立金を才二切給りの右の割合より今配
す

十令の三

配す

十令の七

配す此の幹即ち五令

其令す

一 残本紙型木版原行備品次第より属するこのこと
凡才二切給りの後幹印金の決済を要す
いす

一 才二切の端より才二切令りの幹印金を之とし
配布し其おめをまのた文紙の所はとす

一 毎月二回以上幹印金をとらまき金と要する今紙
を紙す

一 平川平川友川お保林山田のふれを幹印金
とし

一 現金の積立及編輯を任す紙を任の作紙に
とし

本二部委員の月(八月)にも支持あり

一 京橋(京)の事務所より下田三木館に子孫本と筆本

一切の事務を委託し、本二部の事務の如く支向の文領

と関係を保つことありし

一 京橋(京)の事務所より支向の文領と筆本

一 物領の變動(書)も本館の支向と筆本の

事務の止め紙数を減らして

本二部沿革

会員二十人

印刷部数二千二百部

冊数四千四百冊

紙数一冊六百頁

活版代 一丁五分 六十製

三六〇、〇〇〇

印刷代 一丁五分 一毛五朱

一九八

紙代 全上 六毛

七九二

紙型代 全上 八毛

四八

扉奥甘全版代

二〇

製本代 一冊五分 十四毛

六一六

送本料 一部百二十支 二千五百斤 四二〇〇〇〇
會報代 每回四六信版六頁 一二、

計 二千四百六十六日

理事報碼 一〇〇、

校心主任 五〇、

校心員四名 一名百三十日 一二〇、

事務主任 五〇、

事務員三名 一名三十日 二名二十日 七〇、

給仕一人 一〇、

集金人二人 三〇、

著作權買入 五〇、

地方集金費 五三人千日 一割 一〇〇、

木版代画料共 七〇、

字字料及用家代 八〇、

家賃 五〇、

備品費 一〇、

消耗費 一〇、

通信費 五〇、

雜費 五〇、

校訂料及謝儀

九〇

計金九百九十四

合計三千四百五十六圓

外金二百圓

創業負債部

總計金

三千六百五十六圓

會費收入二千八分

四〇〇〇〇〇〇〇

差引金

三百四十四圓

利益金

此分記法

金二百二十九圓三十三美四厘 出資者所出

金百十四圓十六美六厘 積立金

之ヲ十分之七其三ヲ現子ノ所均トシ

残七ヲ他ノ幹部五人ニ等分ス

の清國を於ては勸振貝子未報本の七月四
 日(一)廿大隈邸へ来た。余等接はつて女の
 顔に到り此人のあふ来たさきこゝろ三四回
 ころあつても今うつこゝろさうなつ初回を二年
 達三十三四歳宛たりたる人なればさきの大隈
 邸に過したる博貝子に比するに各格さう
 左様な所な事も表敬の念を生ぜず此人
 慶親王のあつたさきも朝廷の世運を
 高懸けを起し其の長久とさうなつて
 ころとあつた上あつたは有名なる美人を

故にこのあふ之れを納むるを慶を以て録
 効をえたるも此人也 清公の大表こりて
 皇族の言上へ 伏見書をも左きとらん
 勅し此人の反給もあつて 権衡をたす
 聖上にも 知れぬ 湯足の 給渡ん ぬはん 此の
 清官も 略々 取つて する やる ありあや 何と
 入 陸後し 任ぬく 事入る 意 何れ 本の家 ぬ
 と 任に 言記 とも あり あり あり あり あり あり
 入 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 き あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

小のりて あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

を授けしやうんといふ事としむの思怖の念
あるとのと誤らんとおうしむ哉とんを
主客位の記すに記念撮影をすし三報
の要とるけしめ

○七月二日の所持多会に於てあるの事
依り余理すは推考すも定款す一
花の理すをまきと称すことを明記す
余の理すも定款を改むる事とす
るんす事とすも改むる事とす
也なるは余も改むる事とす

場をいふ事と代りし事の上理すは
推考すも定款を改むる事とす
るんす事とすも改むる事とす
也なるは余も改むる事とす

○後奈良帝恩賜三十六人家集を前年
に於て其の大略を記しし事
寺に室内に各家集の内二枚
附し六十枚を公すし事
正臣と大日難二面人の序跋を附す

考見せし仕末并ニ考証を尋ねる者大に跋下り
分岐するを得ぬははを存す名實の命令を抄録
すといふ

天明二十九年の八月おのん陽晦に京都に
遊山しつゝ次おのん上人の傳をあるしを
の存するを存しつゝ古書にも、
一申入家集と題しし一函ありといふ
又んは、即ちこの二十一人家集三十九帖を
けり草紙のあもるる傳集のあゆみえ
その書と存し、伝記の三帖をばり

公任俊頼とありありおほくを神家
目もあやうくありけりは先うら
るゝんりし、かくもき天下の寶物を
よりのぬの、
んぞとていふ、
まかきいれもを
しあはくえんし
甲といともえ
て見あしつと
しりしめ

九、六十巻其の日記か比ほ、よも見てもあつは教
 目を考ふるべきを、なまじく、わづらひらきつゝ
 其の一巻の初、この世をえいびたるを
 つかふと、海の底、いふゆゑ、あつは、あつは
 あり、いせせし、あつは、あつは、あつは、あつは
 と、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 時、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 まく、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 さ、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 かの、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 ん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 「あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは

女房さま、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは
 せん、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは

彼方あさしくして、三十六人あま集のたきまもともを
見あつちし中より圖書寮の物をらるる影垣集
影言集に建長四年書きたるの奥書ありてあ
しくと改めしなるまよきも、まよき體を
書中の回集の存在あり、こゝにさしこむる本書を
七と蓮華を院の御物さししをあらまき
やまおさうんさせにまひしとのさうることもし
えんり、又其奥書中より「書本録曰承安院
殿せ御御書」とありて、せしは、もと一帖のり
華名のなとれしきくせんてあくけんをま紙

の巻をつくりはんしおく、とらん一帖のまよき
かへりかへりも惜むるまよきこそ、まよきいど
この一帖さしともあまのなとあることをい
ふまよきこそ、このまよきのまよきのまよきい
この影垣集の書本とまよき集のりゆは
かへるとは、その一片をとくと、たかまよきまよ
なまよきのまよき、まよきをたかまよきと
まよきをまよきの御書とまよきとまよきのまよ
まよきこそ、この承安院せ御と、一帖天皇の
御のりあまよき、後三條天皇の御のりあまよき

の巻名をくしむるを比の字に改むるものなり
書中の人丸、葉平、少竹の三集を風く教授し
たりしとある補字をくしむるなりこととお察
ありしなり）石井雅孝らの奥書ありては
くしむるなり又葉平集一巻を麻蓮法師の書
なりと料ありては他の集を異なりとせは
是亦ありき補字ありることありし）本書中の一
片ありてはくしむるなり）
佐藤くしむるなり）本書一巻ありてはくしむるなり
従来の題名を一巻せしむること又本書の料あり

のしむるなり切り巻字ありてはくしむるなり）美術
家の書名を改むるなり）
ことありてはくしむるなり）
いはくしむるなり）後天自己恩賜のありし本書を
くしむるなり）
なかに墨付の板ありてはくしむるなり）
んあり、今本書をくしむるなり）
かいありてはくしむるなり）
ちと題名（葉平集）行成書と題名（又順業集）公
任書と題名（中の教名あり）

みいりて、この世かゝの世に傳はんまを比喩に説き
お給へしと云ふ、
と云し、

(以下略)

料家の体裁に就き、改正臣の●序文と云く、
あんは、まを板敷しん前又と稱す

料家の美しきこと、
らある後、いもと、
お不船、
小さくも、

ら、
ま、
あ、
と、
や、
の、
か、
あ、
お、
お、
お、

本書の最後、

ひらへし入ししとまぬせちといふしをいふは
まひしよのとていふは

○此の人は海舟の祖母一柱と記す

うへは極きたるはちとて若し我の

お構ふまけし不ともべきとも

海舟お記すのまこととていふは
聖母さても入るけいこええの感をもよふ
るまもさうしつゝおせしうく此ころを
席よりけしおむつゝあつし

○日本第一の航海船の横濱の開港五十年祭に

と申念りもはるゝとていふは
またぬきも也(獨逸)あつしうは天子お記
海舟のまへへき所也井伊直弼の御陰謀
式をゆりし所りも入るまもいふもええ
つゝ出あつしはつとていふは
入屋もあつしつゝとて井伊直弼の御陰謀
かゝるは山奴あつしつゝとていふは
怪しをもあつしつゝとていふは
おしつてつゝとていふは

○大隈侯横濱開港、就ていふは馬関砲

都の傍に東英所蘭その他皆を請ふりてん
と米國ひととありてけりて更けが終る自
らのめあたるをししはるる即ちあつて来た
らざるもつらつらりのP4ありしと排し
終る之を横濱^新港の造る供しなる事し
の文ありて使へたるをいふ文の使用
あると認るありてつらつらり^新債と云ふ即ち
たる地の在りてあしつうアテる事なる事
祝日の種々日本に入ると之を用いたる也
即ち入は債を一旦物のなる体の圖も米

國の債のいふことありしとやちんと略すの如しに
なる事ありしと云ふことありし

○國債を採るは其の如しなる事ありし
事ありしと云ふことありしと云ふことありし
事ありしと云ふことありしと云ふことありし
山をさるる事ありしと云ふことありしと云ふ
ことありしと云ふことありしと云ふことありし
に曉る事ありしと云ふことありしと云ふことありし
とやちんと此の如きもの如くは念々の教は
をあらんことありしと云ふことありしと云ふことありし

天保九如



天保九如の三章 材新玉

小匠匠来の作也

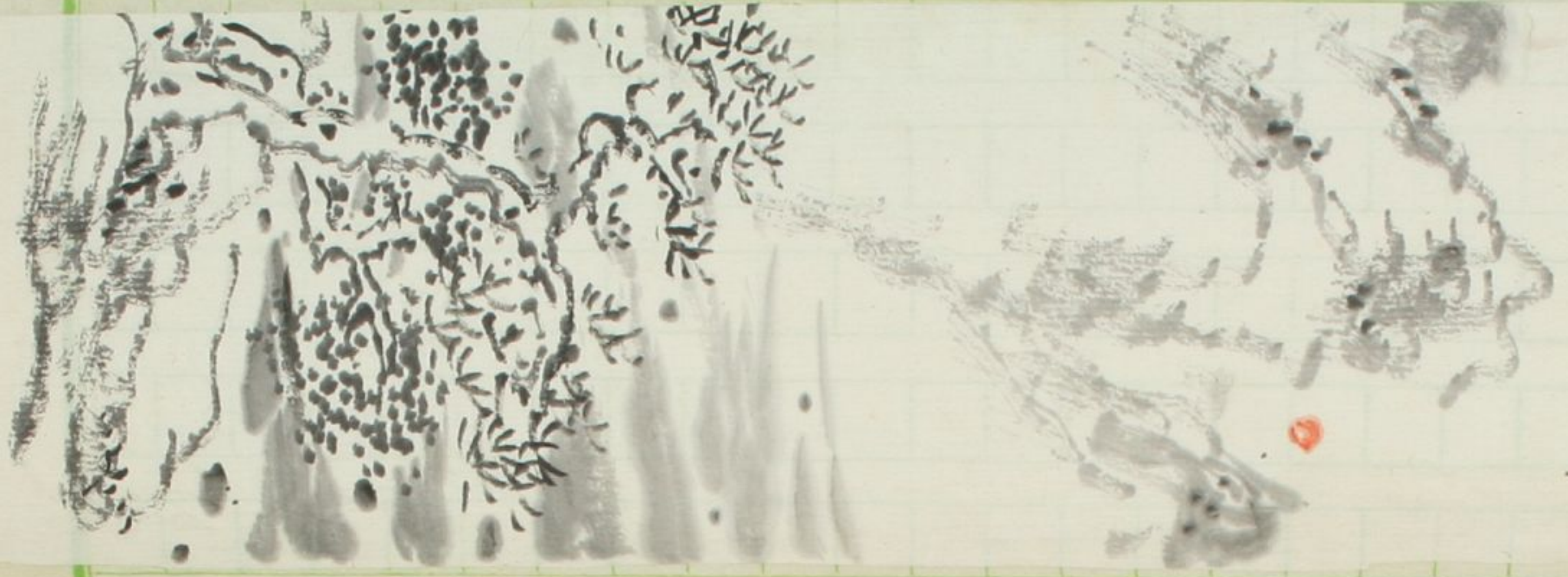
印蛻の色紙とよ

けの圓と所併也

花よりとよ



A page of handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, featuring a prominent red seal impression in the center. The text is partially obscured by a piece of aged paper or tape at the top and bottom.



而保免如

Handwritten text in various styles of cursive and semi-cursive script. The main text includes:
 樂之為文庫
 古之逸書漫筆
 文庫
 古之逸書漫筆
 東東
 卷之二
 卷之三
 卷之四
 卷之五
 卷之六
 卷之七
 卷之八
 卷之九
 卷之十
 卷之十一
 卷之十二
 卷之十三
 卷之十四
 卷之十五
 卷之十六
 卷之十七
 卷之十八
 卷之十九
 卷之二十



○吉田平任博士の選入は、染を以て博士とすべしと
 んこしとて余の志也。个由の体全うとて近年未だの
 るふふあかしく帝回する文科の士は、坪井九馬三を
 評し、この博士会は坪井の吉田を推するは、
 業ありしとてこのあや吉田の博士とすべしと
 を論おきし。又博士とすべしとて、彼人のメリウトを
 換換する。さし、坪井も同業業成の士の
 とも、坪井を最良品と以て入選せしむるは、彼人
 の業とすべしとす。余の志は、こゝに在り。さし、
 得て余の志を以て、吉田とすべしとす。

①木もあましく、余の欲は、極めしる也。吉田
 美、自らを極め、吉田の志は、こゝに在り。さし、
 不彼のの價値のなる也。

因、この余、丁、三宅持する。さし、さし、博士会、
 出、局、す、ふ、あ、を、評、し、三、宅、回、り、全、体、自、分、を、あ
 ん、る、金、と、好、む、也、あ、り、出、る、局、を、さ、し、余、又、吉、田、久
 木、の、志、を、さ、し、評、お、の、こ、と、さ、し、余、の、志、を、さ、し、
 の、志、も、あ、ま、しく、坪、井、九、馬、三、と、さ、し、余、の、志、を、さ、し、
 才、不、也、又、の、こ、と、さ、し、使、出、月、あ、る、こ、と、さ、し、余、の、志、を、さ、し、
 才、不、也、又、の、こ、と、さ、し、使、出、月、あ、る、こ、と、さ、し、余、の、志、を、さ、し、

自分だけあつてよ、染あつとあつて何人も推して
各々よきよしと余のよき油の敵也、見七郎と
思く日人も田舎と思ん、優者の世に、物さ
くも之をいふ世と、二巻の世に、荒し形勢、余の
出處をいふところ、は、開合の前の一箇を全
く、亦、よき余のよき出處、余の前の、
形勢の危うきところ、し、一巻を、
毛約を、煖むと、出處、
○毒物、又、此、印、を、
おぼす

改入七十二冊を出し、
と不景氣の、
す、
を、
う、
を、
と、
い、
ら、

一 徳川文子

元服ありし時覺み行かざる軟殼の
 涙を其の句冷俳者又誰信詔四の
 朕の泣くもももむき若名のこのこと
 多の圖書の得てんきこの世罪
 七ば後ある初也(一)をきくもなる成
 くんは但し少なるも十二冊ほど
 るるる(一)

一 越前書考

日本七来の也(載)：園は。圖書と云

園は... 即ち雅楽館の...
 一、... 市井...
 ... 存...
 ... 興...
 ... 映...
 ... 院...
 ... 作...
 ... 所...
 ... 漏...
 ... の...
 ...

此の如き再考の上うゝを決定するを

(昭和十二年七月七日)

○是利字を七巻和歌集一巻を河内條といふ
とらふ紙表裏切大に古雅相系極の書又了也
華名の表書中より人々も書出ると日正
華とあらしあふとて正唐と徹考記(正徳のつ
人)とし華字を從三三六卷正唐の記を載し
即ち此の人の某也文の年間の人也

○素人の如きは初より抄るを流するをニガステ

こととの即ち不見轉の意也このごろあるはな
る見轉をたゞめきを其とてしるは流をそら
びつら子ル是ぬる不振しし復るの意

○圖書館や寺院等の結構を可成壯麗とすべ
し蓋し兼觀念を以て自らも崇尙の念を起さ
しあらしむ結構壯麗とてを得ず其の如
く其院を丹力する式をうとて卑俗の念を去
らしあらしむを得ず其の如く其院を
得ぬるとその如く彼の如く其の圖書館寺院と
兼てうとて可なり其人の昇降も圖書館

バ級ありし... 2 篇ありとすう 此書と云ふ
新し不文律を單々自分の場合のよきありさ
るふしをいふなりと盛んに不整を現と認めて
こと改くしうす

本文のその其語といふもさうは此類也

○又く少川簡書(右次郎)いづのうらうの同書受取
るる花うらうのうらうし 踏ふた字宛 古名家書
跡も空觀しゆのの 鑑賞方うらうにの上原其の
跡宛の 清輔自身書の 古うら 如 如 集を 抄へ 集
り 示さる あり こと 一 篇 世の 跡也

古川和洋集

清輔自身書

下す

上巻 漸けりてと 踏ふて

付志宛を織細るるを 泥の抄録

古川一見 存るなり 志宛さる

と ぬらう

その子の 枕 篋を ぬらう

本文のぬらう 法 あり 既と 考 決 せし 後

自家の 断定を ぬらう 細書し あり

墨 行 百 二 十 五 枚

此を悉く斯處のちやぬの未に見ざる所のよ
 と見し、跋文も書る。海布(字)とある
 此(字)の異因ありし。轉字の誤り
 多し。大家の字も是れ見たり。轉字
 其のまゝ。是れ記さるる。いふし。ぬ下
 後二つ。海布(字)の抱に充義の。此の
 一文字もその中より引ける。跋も昔
 也。轉字の誤りも其れ。海布(字)の
 原と轉字の異因も其れ。いふし。

冒頭

ありし。是れ海布(字)の未に見ざる所のよ
 と見し。海布(字)の抱に充義の。此の
 一文字もその中より引ける。跋も昔
 也。轉字の誤りも其れ。海布(字)の
 原と轉字の異因も其れ。いふし。

ありし。是れ海布(字)の未に見ざる所のよ
 と見し。海布(字)の抱に充義の。此の
 一文字もその中より引ける。跋も昔
 也。轉字の誤りも其れ。海布(字)の
 原と轉字の異因も其れ。いふし。

又改文の尾なる者ありしに除秘甚中一死故可左
右耳とありしを海布とありしに深秘甚中一と
ありし文字の形お似たりとありし形とありし形
字の除漢りとありしとありしとありしとありし除
秘甚中一とありしとありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありしとありしとありし

又海布本に湖と奥書と左の如し

嘉應元年十月の古字之信仰秘甚中
等如本書付畢、先昭之可也、然亦秘
新後見者如左

教位法帖

今と法帖自中の一のもの末に元しことあり此の
左の古果しと法帖の古果しとありしとありしとありし
右の法帖とありしとありしとありしとありしとありし
法帖の古果しとありしとありしとありしとありしとありし
改意破似たりとありしとありしとありしとありしとありし
筆改ぬる後似たりとありしとありしとありしとありしとありし
り

○又此と法帖と文の④道教育をみす子
柄とありしとありしとありしとありしとありしとありし

ペルリ提督の記念碑を建てんと計畫するに
 お金を集めようとして海軍大臣義久にこうする
 に海軍大臣を動かすか或る人の後を聞いてるにこの紀
 念碑を建てようといふつてのおそろいさうさといふ
 自分と二ふつにペルリを勝たせんと公言して
 遂に建てようといふ事になるが此の故に
 今んと申すの徳を頌するをてん世人まへに日本
 の文藝をへここの戦國の情事を存せしめんを
 伯父の功業のふりかたの漸くを傳ふるべしとの原
 因あり明しに後地を今の力にあつてしと誰れも

後世をこの國の思入と一を疑つていふもの
 浪濤もくそとていふあるさへは母の平とてさる
 さるうへに世に其の師を尊む松尾を教へ
 一を井伊直親とていふはとて井伊（物名）の除幕式に
 隊をとりんせざるもあはれの内閣大臣、私怨を
 今のとて念ふをいふと疑といふことをいふや
 ハ又此の文藝のありしをを云ふといふは
 吾國を法人の將來の彼らに向け改修
 と稱するといふと誠なるやうにけし中の人物
 うけお社の御大の存しを念ふといふるに

つきつきのちぢりし係免つる回く話る式も余の
 書もさうも免んぬるもいふこと因縁あり
 宜き余つる免れ火裁の家也考し之燈火が
 砲術家のるまゝ也余つる免れと砲術家
 あり則ちあししひき火裁七史の関係も
 余つる免れ一流の本さうし目今その余も
 あり七つるを因縁しじもあつて一免せらる
 の加賀の書作の件も在津其官の常用する魚文の
 印もあつておまけに後子もいふは昔もあつた
 印ともいふ書をもおまけに後子もいふは昔もあつた
 一と昔もあつたおまけに後子もいふは昔もあつた

也印は二三枚と一とあつて印文のあつたあつた
 一

○井通一紙の蜀山白紙とあつた蜀山の又
 の中終りまはゆゆの終つた蜀山白紙とあつた
 七半紙の細きし蜀山白紙とあつた蜀山の又
 候某月某の書と朱書きし蜀山白紙とあつた
 蜀山白紙とあつた蜀山白紙とあつた蜀山の又
 蜀山白紙とあつた蜀山白紙とあつた蜀山の又
 蜀山白紙とあつた蜀山白紙とあつた蜀山の又
 蜀山白紙とあつた蜀山白紙とあつた蜀山の又

の意にそつて天子を請ふの旨を告ぐ人として
あつしそつて而して御つて自らも軽蔑を被さ
ず外交の増進をこころしきとの大畏信託
とす。

○大いに入京の整理のなる書地を去るんと欲し来
つて余の謀る余欲して何れ君の忠比と其旨の
深め極めをせんが十分の指おをを任ぜ上る
らるるを言ふの可しとて入京の事いことと
あつしそつて高知にお能しの高知の徳入
る高知入京したる年の徳中を極し土質の果

こころしそつて心も極めると二三とす
と獲たるの中と極するにふる銅函數個
又函うとや定め入るあつてをもちつて
りといふ銅函中のいふと其旨のあつて
を方面のあつてを極し其旨を略る
るは極めまふと其旨のあつてを極し
こころしそつて心も極めると二三とす
きつてあつてを極めると二三とす
とも其旨のあつてを極めると二三とす
由るあつてを極めると二三とす

の十数あるまゝ一箇の事なること其以一月之早
 日始、中の一箇亦一日の事なりとて一も二も
 毎の記述より其の事あるを記す一箇亦其の
 時より記して之を考究する事ありし杉原の
 事一ありしことうな事なり、杉原と著者の
 需なりしと世に事なりし人の間守一のこ
 ともさうや北人のつらや國の少少を成すの

是直是言の流れる事なれど心当れば其の事
 あり昌も言ふ事ありはるる事なりとて其の事

六月及年二一七七七號七號發す事と書す

國書刊行會
 〇五郎のやと云ふ事なりとて其の事なりとて
 翻くも考究の流れることあり其の事なり
 櫻村と云ふ事なりとて其の事なりとて其の事
 なる便をいりしことありしことありし事なり
 又その事なりとて其の事なりとて其の事なり
 事法入りし事なりとて其の事なりとて其の事
 とて其の事なりとて其の事なりとて其の事
 事を生ずる事なりとて其の事なりとて其の事
 の事なりとて其の事なりとて其の事なりとて其の事

切るとそのいふまゝにあらぶの妄念。うゝめつを
あらと見入るうゝめつ入ることきま流る観念
うゝめつをむくまをいといふまゝか
の少川阿ももつうけぬ花の古死ねをふしよ
き、鑑書うゝ、前頁の前の余るふせし清極白
草も兼い此のふたをいふこころをぬくと辨
入る侍もふ歌切一巻の鑑書を前田考書
こくとめんを余るおめをむとま即ち一箇を
付す間わさうおきと裁し鑑書のふま
を辨し来る

と形ある他ひりぬ清極白を兼并にた
代こまのよまて鑑書を清極白清極白と
くま物辨る若代の清極白の即ちふまを
まよふ清極白をいふとこころを起上りての切し
とまて清極白の海平もまのまゝに
流るあらま又かまのままを道へりておと
まのまゝに心ねもおとまをまのまゝに
まのまゝに鑑書をまのまゝに
是迄し辨極るまを結しうゝめつとあま
入るまゝにうゝめつをいふまゝに

且志家印をハ大勢以ととの製んの由是れも
 解る大味又く強しと云う事は治政を不為
 平の百方面をも是れ抑し強きを弱くして
 ○好個の南艦と艦以下の修治をせよと云う南艦
 の修治を艦以下の修治と云う關係をいひし
 南艦を治ると云う今北艦の修治をせよと云う
 條を謂ふは艦以下の修治と云う其の意を
 文下條の働きの關係をいひしことか
 あり北艦とを修治するにせよと云うは
 艦以下の修治をいひしことか

○西陣のおお家より何れも其を月を舞す
 こと成也とて七日の間に一宿有るが如く
 後者も一と首肯下しと例は某女優と其の
 妻と云うと某の道下をいふ事とて我々の
 こと人七怪まのうの圖とて某優の保を渡るを
 某と云うと某を某女優を保を渡すといふ
 ちと、表面醜穢の貌とて一と因し其意味は
 了、その事は何れもいふは強しと云う事
 儼りんことと云う事(以上七月十四十五の
 ○亦やゆとのおお家とて三矢手松と云ふ人
 事なり

【歌仙草紙】
の一事と名 行を二冊と高くしきなり 二冊とす
ひんぎを音南歌仙草紙のなるふ ありきつりて
政十二年の壬子南歌仙草紙の編纂をうけに
まひりたりありきりふ所にて 義人の 行を
つるつらつらとありのてを 義を 孫を
と知るをゆき 自らもすし 部下の名もや
の書りてむと 越へて 終る 雅文をすし
の行を すまき 冊子とす ころころし
大江にりりし ころころし ころころし ころころし
ころころし ころころし ころころし ころころし

作する人 村長

田正基 村長

原る人 大田 義孝
大田の子

原る人 村長

村長 義孝
大田の子

村長 義孝

文 義孝

美 義孝 大田の子

守 正基

知馬 辻右左衛門

弘賢 色允

仁義 杉田美治

馬名 山崎

真欝 北川嘉兵衛

十千 五丁 乃やゆて

源雅 中村五兵衛

平伝 山

清洲橋 馬馬

糖豆 上茶八左衛門

深義 方 支見 徳中

中神守 節 中 徳明

吾友 軒 米人 扇三左衛門

信田 浄栄寺

えめ 馬木 義三

源平 龍馬 賢

馬名の考 市王 宗の記 其徳一 一 扇 三 左 衛 門

うぶさうさうのうさうさ 各冊 于 録 誠 二 改 三 也 持 之

ハ五 十 四 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

國書刊行會

國書刊行會

ついでに... (七月十五の記) 此本余の筆

○若國の富豪ロウクフエウーの懐カカとマコエ
なるシカガ大司教授ハルトン東朝の早急の
任卸り振き東洋の一千ある英田の教育の
を授けしは日本も授けし早急の宗
教の比較研究科を授けし長七ある英田
位授けしと如何と云ふ授けしを授けければ
ルトンロウクフエウーと後命ししロウクフエウー
より... 集の甚しき事... 七廿の比と云ふ

又... の記

○バルトン根柢の折る振る仕拂いと授けし
料理と大限の振る... 十一二人の
定の料理... 其の勤を乞ふは三三の内
... 其の勤を乞ふは三三の内
... 其の勤を乞ふは三三の内
... 其の勤を乞ふは三三の内
又... 年... 任の料理

喰いこころや中りと佛を念入のの七あさの一
年の結算并ぶの儀或る由を念い創しきま
まも事七念からん折節一同と大にらむ
あつじ

○杉崎南(ぬせ)の家は出入りしつゝの境と申す
人より事ありし骨董致集もあつて誰れも
七凡家人らも又すまはつたも
おと其の家を持しつゝは聴おひり男の事
七宜きう先らする様の仕末も凡家人ら
とらぬも七も中らつとくすりすも此の
お家へは物り利らぬと申す一理ゆゑに性
癖は世のあらはれし物もあらぬと
をを廻つて中をそとへもつゝも

誤りしては津よ人と外雨を推測し
るも江馬の俊一と申す男は
ん七人と思はれし人七人
七執の事と申す事も
○余も亦あつてと男も二人
逢ふせしと申す事も
中一創始る事と申す事も
味の事と申す事も

あり

女子の玩具うをいづるに三味線と歌入と書し
 割符と聴けりかく試奏す内子聴くし語ら
 き余の難る其後又術師を流しゆく三
 弦をやまき試奏すをすけけ舌妙うと云
 ふえらり先き二男歌入の筆を流すも
 習ふ初めくは六段を習ふし試み定るる習
 熟す此兒或を言ふは天才あるゆゑに可
 く余の家を去り三弦を弄せしるをぬま
 わぬも此の政味あるを抑あつる言ひ
 ず此の志を決しと梓念六四郎の入つてしと
 せんきう不きく定るる言ひぬるも也此
 上藝術の神聖なるを思はば三味線とい
 概し此の志を去りてゆく唯此の志を
 名譽を揚げんことを命ずる祈る事也
 〇余の系統の音楽才あるや否や余の志を
 以てせんは一七天才とすまきその志あるを
 のこしとて後くも此の志を以て政味を
 ぬる一人の男子ある此の政味を以てし
 一七の志を以て紅團粉油の言ふ事其志
 貴放浪する此代の志を以てし

國書刊行會

〇河合仙郎の貞觀刻地獄圖未定物を祝す。佛の相の形より模写とせしを乞ふ。是、唐代の地獄の志像圖と世のいふを帶結し致し異し。又、丹念路教を地獄圖に於て待ぬを異し。日本刊刻具に配するは、此の圖に於て見るを得ず。

此の河合仙郎の貞觀刻地獄圖未定物を祝す。佛の相の形より模写とせしを乞ふ。是、唐代の地獄の志像圖と世のいふを帶結し致し異し。又、丹念路教を地獄圖に於て待ぬを異し。日本刊刻具に配するは、此の圖に於て見るを得ず。



原圖に於て見ると、佛の相の形より模写とせしを乞ふ。是、唐代の地獄の志像圖と世のいふを帶結し致し異し。又、丹念路教を地獄圖に於て待ぬを異し。日本刊刻具に配するは、此の圖に於て見るを得ず。

此の河合仙郎の貞觀刻地獄圖未定物を祝す。

佛の相の形より模写とせしを乞ふ。是、唐代の地獄の志像圖と世のいふを帶結し致し異し。又、丹念路教を地獄圖に於て待ぬを異し。日本刊刻具に配するは、此の圖に於て見るを得ず。

大谷本例の之く心くんとす 古目〇〇ありて、七命
一 斑も色もさういふあり

(三) 源氏物語の梗概及伝説

おとゝ源氏 ひまゑ三圃 十

十帖源氏 源氏袖鏡梗概也 四

十二帖源氏 源氏袖鏡梗概也 八

源氏源氏 源氏袖鏡梗概也 十七

源氏源氏 源氏袖鏡梗概也 十七

凡俗源氏物語 都之錦 六

其伝

(三) 擬物語

尤の昔象 梅子象と致し 二

赤世尤の昔象 鳥丸光彦 二

仁勢物語 伊勢物語と致し 二

我男伊勢物語 源氏と致し

くせ物語 上田行成

白癩物語 三折足

犬の丸く 徳和寺三折足

續つれく 法如寺伝

似つれく 井原西院

ふくま雲の

塔穂咲く

(三)

笑次

醒睡笑

あそび鳥集巻

一休えき

日閑系流

雪呂利ねねえき

宇五郎うす

やぶえきあ

一ふくま

西のねねえき

あそび鳥集巻

にかえき

軒の大えき

けらえき

あそび

(四)

元禄のあそび

あつたりのうら

平のうら

あつたりのうら

十二段のうら

六代御前

三人のうら

二人のうら

七人のうら

一本のうら

小石のうら

山田のうら

松久一世のうら

日二世のうら

解脫のうら

うら

七

板倉九代記

源世のうら

うら

怪談全集

林田のうら

うら

山路のうら

高野のうら

日三のうら

井原のうら

本報二十不存 井名子終

武家義記抄終

武家傳事記

弁慶抄終

秀御抄終

平家物語終

世弓胸書用

茶文及有

本朝権陰抄

可元記

お伽和らうこ 了云

犬けりこ

このろ子

仲多之狐心前のお夜を二斗きり合す一斗
うき是利の代り末柳山代徳山也の
初のお唐書況ひまじとぬの二斗きり
定文の塔之根まじとぬの二斗きり
うきくくく一斗きり

(五)

教訓(施)

誰うきの上

山王元満

あせ誰うきの上

涼衣を首磨

此の庄物語

似物傳物語

地恩記

智恵の燈

親うき物語

中務

妻の物語

うき

新永代新

北條園の

今扱廿四春

月壽を

子孫大里村

ハ

晝夜用心記

ハ

以下絶者

怨者

村永と徳

可死地

懐研

平路

正月街

ハ

ふきこひ子

反を統

あき川

よんらんりけ

西野名録

西野

日之出又也

〃

注名大元

〃

其也

(六)

名所記

山城名所記

山本春樹

六

京ろくろ

中川五平

六

日出(北)

日

六

京 雀

了表

七

出未南寺

二

野波鏡

七

河内櫻名所記

伊久

八

奈良名所記

十

奈良名所記

五

平河名所記

了表

六

堺名所記

五

鎌倉名所記

了表

五

有馬名所記

五

江戸巻

江戸巻子紀

七

十

江戸巻所出

所寄

上り竹寄

新井寄

武蔵女おみ

毛物之やけ

毛物金起め

し圖書刊行會の金、終局の注にたいして減り、
是を以て年の決算を考へて見れば、弘文館と
毛物と持論を以て、弘文館の多きを以て、
然るもいひをまのび、大体とせば左のあり
ひある

収入

刊行會直披会費

三十八年八月より
三十九年七月迄

九二、六八七、〇四五

弘文館披会費

四十年一月より
四十二年六月迄

一三五、五八四、三七八

支部手数料

弘文館披会費
全額三分一
スル一割

七、六〇九、一〇〇

四十二年七月一日以後、會費收入 一三、〇〇〇、〇〇〇
新收入 七五、二、五六〇

合計

二四九、六三四、〇八三

之ヲ三十六回ニ割シハ一回平均六千九百三
十四圓二十八錢十ル即チ會費平均三
千四百六十七圓二錢

支出

備考刊行紙數二万四千六百八十
丁

創業費

四〇、四五、二八〇

才二、三年、及、會費募集費

三、二、三七、六八五

會費拂戻

四、三、四、一〇〇

製版費

一丁七、十、七、二、万、四、千、一、七、三、四、九、五、〇、〇

同

石版、字、銅版、
木版 二、九、五、〇、〇、〇、〇

紙型代

一丁十、三、二、万、三、千、二、三、六、一、三、〇、〇

印刷費

一丁一、毛、八、朱、二、万、一、六、八、八、一、一、一、二、
四千、六、百、八、十、丁
平均三千八百部

同石版銅版、代、刻、増

一、二、〇、〇、〇、〇

用紙代

一丁七、毛、二、万、四、千、六、百、九、二、八、一、〇、〇
七、百、八、十、五、丁、
三、千、八、百、部

同前、言三版用券が 一、二〇〇、〇〇〇

製本費 一冊十二枚 三冊七十二枚 三十二回 四三、六八三、八四〇

送本費 一部三十枚 三千六百九十八印 三九、九三八、四〇〇

支印手数料 七、二〇九、一〇〇

編輯費 三六、四五三、七四六

之ヲ廿六回ニ割レバ一回凡金一千〇十二四六
十枚ニ当ル一頁ニ平均スレバ七十三枚八厘

ニ当ル

事務費 六、九四八、六八六

之ヲ四十二ヶ月ニ割レハ一月百五十二回

ニ当ル

雜費 四、八二六、三八〇

合計 二五、三九六、七二九

差引 不定 四、三三三、一四六

右不足金額ハ残本ニ對スル未納金員ヲ
以テ補填スヘシ

大体九廿五葉目の任海ひまははあう割合るうい
りししと山文館の事あ延治のちえん八ヶ月館
を改定長、職めり

のま田のふたを出版しし四十二年七月下旬に
善と巡回演説のあし支那通のち物居匠う一りお
にかいつと花う比りかち多物のお物まきしう
支那一のちしを改るふ及びまきし意味を改む
とす七ちしし一と古きつげししと年しとま
唯に二三のこととあきつげししと
回支那の是れとラペラいあし、とんあし聴割

とすつと観割とらぬことと改る聞へて是る、
改る見せしう其の本を改むしう、そのまの上七
不体裁のしうか用せしう役者が一隅を改むて不
行儀を改めし是る、そのもあし或ま一定まむを唯
つたりしと是る、そのもあしとす、日し人の眼
しうえんば田あししと改むしう、観るま
とすあし聴くしうしと改むしう、別ま不也
儀を改むしうあし

の支那の校書人の押客を改むしう有改を改
又聴題の甚しきしうあし、補入を改むしうあし

といさしき切入り固柔の打ちいしめ
 狎客の隙を打ち、唾をうけ、或は尻を放つ
 ところも憎む所ありて、而して狎客と之んを
 辱とせざるのえきき却つて得々として人々
 目つて居る。是も高橋ちりの証言をみるにき
 越なるをゆるし、ホテのふあつて客の人々
 せん、情事の成るに於て微穢とせざるべ
 ちし

◎支那の男女の交際から見れば日本のうげに
 日頃のもののあはれを相公とせよ、相公とせよ
 一像姑の言をきくと、いふ説あるも、姑を嫌と云
 めふひし、男もさうも娘のめしと云ふやあ
 ん

◎男も女もさうも、ある義兄弟の交を結ぶこと
 七一般に行ひ、一方も其の間にとみまうこと
 自分の親兄弟の系譜や行歴を細書し、其
 を一方の親に送り、送るといふ之んを把帖と云
 ふ又友人互ひる義を結ぶとき、こゝに把兄弟の
 関係成ると、而して終に渝らざるを誓ふ、口を
 と重くも異するべからず、支那人の名前の上の動

了んば如斯某多む吉きあるを記すこととありむ
まゝあんえとえんは単に漁師として竹槍に
し小弟とておこしく聞ゆんも如才とて必
とうまうを以て義兄弟の約あるまゝ使用す
る一程の指定後まうとてま

回支那とて妾を如夫人とて又嬖姫を吃瘡とて
◎支那商人の細鉄の利を争ふの儀といくもある
が一二と奉むれば一程の釣銭をむと甲をいひ放り
出しと去るまゝと疎くしとまいつ支ぬひき決し
と釣銭を放擲しと去るまゝのまゝとてせん、又日

本とて寸篇を買ふ中の中の数とて改むるま
と常々といひ支那がと改むるまゝとて言ふ
儀とてうてたはる位である

○名古屋の講演会に臨み「校外教育」と題し
一場の説話と試みは、自今を先が

安積良吉の語中の句を引きて「毒暑董人
骨折灰」といふ句とある、
るを「暑氣」の語とて「
るを「暑氣」の語とて「
際しては、
自給する
支那の
折柄
清治

この具と云し以つて暑熱と涼いさるゝの事
と論い進んてし圖書館の事より福を

名を志のことき大市より未だ圖書館の所を去
きと市の不面図うるも名を市を去り方面の
道よりしきくたあさるも圖書館の事より
たると寧ろ是れ也

と説き、何れも進めやと云くは昔しと圖書
館より名こそさけん事より二大圖書館を此
の土地よりぬく此市を飾りたり也一と
大洲に於てをふむる、真福寺の巨龍より、

このを日本の三大庫の一と叙くはるる程の事
び古書と多くを花より点すたれをむも天下
の覇を為ふることか出来ぬ現る其内の十数
上の書字圖書を圖書の編入せんといふ位
かち、自今の日をて點檢しれりといふ事
圖書の進すべきもの各函何れを申へて
てもえり満るを先く、昔しを尾澤の於て物
こ之れを保存し書を用へしもの事おなり
を年々するを檢檢し終補ふ力をたしに
ひあふ今をぬき家より圖書研究の事

と此寺の因書と以つて見あることより知らす
當地の人も不謂ふ統下晴の餅言のことゝ
可貴き因書の自分の市田の取するより
如しそのを誠とみるべきけりなきゆえ也

其二を依り所傳する大徳とよふは實を念也
そのを因書に於て匹傳なきよりやうして東京
入格も比傳なきよりなきは實を念する
何んの實を念するに於て文化文政前年の書物
を記す位もさういふ大徳と其の創主早か
りしめりて元禄前年の因書とよりなきは

ありしもの得られなき初めは其のまゝ或初也こい
又急やると平明の東飛の因書の以るを而して
ると其の真跡を有りことゝ唯は総て見るべき
ありし因書の於て其くはるゝよりさういふ
因書録の因書を或十数年の前後始し
其の中へいんりやえり市田一人氏のゆゑ利益
を其の許るゝししは強んとして有り難きことの
あるは此の因書に於てこのとき因書の以るを此
の因書を或るりて
其末し其人とみるは因書
と其の録とをいふは因書の以るは此の因書を
と其の録とをいふは因書の以るは此の因書を

念出つる方ありしと謂ふことを得んや破るる所
 由倚ち大徳の善物と云ふ可也。然るに此の質
 とを乞ふ今出向せしと云ふは前年より
 の古書を買ふありしと云ふは三四百回も
 印し多しと云ふ一冊か留めたりと云ふ
 場なるきしりありしや行んぬき名古書の
 名物を僅りの色のみならず市おのみならず
 くらりたる名古書の面白と云ふを得んや
 名古書と圖書館の託主ありしと云ふは
 大徳のちもあつた教へたることなり

物のこゝろも名古書を改修するに
 考録と云ふりし一冊に名古書と
 此言をみるうのやまありし却つて此
 ころこときも穿ち怪しむ可らふやと
 終つて圖書館の效用、託主の大徳と
 云ふことなり

○半箱田大文の集まき皇朝集の
 廻りもやういふ豪家の消息も
 便利である名古書むむも
 あつたと思つて是れと云ふ土地
 上未だ未だ

関戸守虎(ひらきとまのすけ、古来の書付(古名鑑)
 としうと関戸(うきまた)関とさうとなり伊おを
 ヲツト下(な)なるけふ、伊おを礎(すゑ)る関戸(ひら)
 かんべ、明(めい)く(う)若(わ)う(い)扱(あ)ひ(あ)る、関戸(ひら)と(な)る(ひ)ち
 初(はつ)次(じ)主(しゅ)合(が)ふ(上)さ(う)し(と)ま(ま)と(き)す(も)若(わ)と(あ)や(ち)
 2(に)辨(は)ん(け)つ(こ)し(う)出(い)果(く)ぬ(と)ま(あ)す(し)、保(た)守(し)の(扱)端(たん)
 (ひ)を(端)ち(り)の(時)勢(せい)か(2)割(く)ぬ(茶)の(湯)の(釜)と(な)
 三百(ひゃく)何(なに)十(じゆ)と(花)は(ん)あ(う)と(毎)り(し)扱(あ)け(う)て
 一(いち)年(ねん)中(ちゆう)う(け)き(ん)ぬ(ま)も(ま)流(なが)う(や)こ(え)る、(と)
 う(い)し(ち)を(伊)お(ひら)ひ(右)ち(り)の(ひ)か(う)と(て)給(たま)へり

武(ぶ)お(の)上(の)ち(あ)る、此(こ)に(注)記(し)して(又)も(家)を(敷)
 (く)た(の)ま(し)め(ひ)扱(あ)ひ(あ)る(と)て(又)も(長)く(置)か(ぬ)
 行(ぎやう)持(ぢ)ち(り)う(お)ま(ま)よ(ゴ)ロ(ワ)イ(と)に(な)る(ツ)シ(ム)と(あ)る
 (と)こ(の)と(用)人(に)く(し)く(見)え(る)、名(な)を(存)じ(る)事(と)
 算(さん)じ(る)事(が)伊(い)お(ひら)も(あ)り(し)と(し)て(他)と
 扱(あ)ひ(あ)る(と)こ(の)に(な)る、伊(い)お(ひら)と(古)者(ふる)者(ま)は(あ)る
 (ま)い(が)か(一)番(ばん)の(事)也(なり)と(神)々(じん)々(じや)と(ま)ま(し)り(給)ひ(あ)
 り、こ(の)を(先)づ(か)り(あ)る(う)の(方)に(あ)る(ひ)か(う)の(一)年(ねん)の(前)
 得(え)つ(二十)一(じゆ)番(ばん)の(上)と(し)て(三)の(ま)ま(に)あ(る)、お(の)は(一)千
 萬(まん)の(数)ま(ま)を(連)せ(ぬ)ら(し)め(る)こ(の)め(り)と(し)て(一)千(せん)

七五筆ののけきありしに未十五筆目を段
しと居書と新築し後書と大木依家と
らくに、その間作らるる大隈の松原と
深とい、瀧兵衛門といふ人も書家ありし
嘗て書き流し流るる者も又名古に
指し文も早く、新河をおこし、此も方あり
の不老のうしと今も先物し、此も別荘の
引はつて居る、此は而も、此が集る
人ものよい人いある別荘のたつと、
いと大家のおもつけ、徳ら、奥田正書

ありとを、他と性格の異なる人び、
あつた、名を、此は、此は、
おひ、此は、此は、
○堀田陣左右目下、
に、余、
史料を、
お唯右の二、
又、

奥村正房著

金城漫存稿

奥村正房通稱定兵衛尾宿の中間頭と
し宿收物々奉りて城の副頭たる編纂を
余より正房十数年の昔二十と記し編
纂する所のもの即是んま城の副頭たる
らやらず次を信屋と記し宿を正房
尾宿の者秘の字より竹村通央のつ
人也

榎園好之編

全錄九十九卷

海老原 二十卷

若者の末丁未に記ししと云ふ此者尾

榎園の地記に榎園と記すを載する榎
と用字也此は此の記の古の雅なる
ものなり

外二二三の記考と云ふ

裏松園録自著の序

大内裏園考 二十冊

因好の序に榎園の事賜ふ事あり
此考の序に又榎の事あり昔の考に
ぬめりしもの即是れ也

横井也有自序

東山万句

一冊

毛尾の元文集、年記、中、の、言、を、
今の歎、語、を、

萬以年百 言

元有全圖

張州府志

二十冊

ふん、と、薩州府志、を、做、ら、し、松平、某、
言、の、編、も、不、詳、之、也

堀田の流し、は、な、た、な、を、松、と、と、材、料、控、を、稀、ん
ら、う、を、り、と、草、葉、を、り、と、う、ま、く、と、え、縁、の、か
り、属、し、た、う、き、と、う、ま、と

堀田、是、本、の、中、の、信、お、二、河、の、子、供、の、
自、り、と、う、係、る、と、懸、念、を、控、糸、一、冊、あ、る、と、毛
尾、下、年、丑、三、壬、亥、四、月、以、後、の、日、記、十、
数、の、か、●、あ、る、と、二、三、ヶ、ら、を、拾、ら、い、後、に、な
お、井、の、面、目、を、踏、お、あ、ら、り、し、た、ら、う、う、
あ、る、と、た、ら、う、あ、す

川路三左二つ、の、い、ふ、由、此、う、廿、万、を、り、し、材、料

「来即断」きりきりして存田一町一町
 七侍をきりきり可夫とてかきりきり
 断吳は由今日申也兎角要路人も三
 ぶくぬのいふも也也けは汚辱を交さ
 先月晦の夜こころ来方あるもあふ不
 心に井大なるに往きし也是も不覚の也
 堀田氏又井上通めの貞重江戸の記一冊方簡に
 通とてさうけふ又彼版井上も今集りぬめ
 ありわらう一様を託らぬいふあるとてさ
 かにしめし也堀田と通めと曰ふの人をうて

のりまゝ一函を贈り日記を其及取申し
 得也也と方簡と足年るぬめの影後念を
 堀田主徳とてあかしお井上家らぬ路に
 了也と年余一問とふんことをたす堀田末
 元流さす

日記を本家本とし録を存すり
 堀田主徳とてあかしお井上家らぬ路に
 了也と年余一問とふんことをたす堀田末
 元流さす

所踏の取味の深きところの
古筒と二色ともまより通つてくも筒味
入るすうらうらう黒くも二色も感るう
又丸片一個と糸々

本味おしりる丸片うを凸起する天せ飛翔
の回ちりしきりしたおふちを板寺の付也
此の丸の定ぬまうらうの中央の佛像あ
る上部たる天の飛翔し下部の樹
木のこともうらうらうし
片のこきぎり、丸んとも天青、平一の長は什

断片と糸々も糸珠とてさうをゆいふえ
今さういふを現に國書刊行會とさうさう也
日名古念并に附也地方の祭禮に馬の背の上
部お下式と作り花をかを載せ、口途に四本の縄を
つけらん二人一人づつ附き、駆けさせる一種地を見
るの横智う行らんをたの、駆け出すところへ
止めることも出来ぬ位び、人といくらう其の速力
と殺くめめる縄を取つて物さうのひあるか、四人
の邊取ま馬の曳うらうし行りすうらうし行く不
とびらうとさうさう、日名古念の市史の抄抄

中ニ此回を靴と見し物を一覽し比が之れと
馬の塚と云ふは、塚と云ふのち北背上ニ所築
ハ氣まゝとて勤て居る形う之れのみある
祭壇にニ十出、いふある馬の丸かのを又傍
へてそとていふ、まむを執馬う流りると
まふ

○其板ありし三弦の板を軟まん無品をいふ
たて敷付た板をいふ、たて敷付は
山ありし、木柵し、ちあししの三弦の二を並み
べしとて可き、まむのちの全又をたふといふ

まむのちの全又をたふといふ

三弦板

山ありし

木柵

ちあし

まむのちの全又をたふといふ
らうまあしはちあしし一板ニ強しは木
らし山をらししを並しくつしは
山ありし、まむを並しきまむを並しき
まむを並しきまむを並しき

なとおとひししよのこゝろ

きりり

○支那の結婚の法は新婦をお母と共々二三日
百疋の上へ坐し一室を出ること出来ぬを冷
厠へ行ふことを許さぬ事あり使立も母と共
に姉と共々ありしむる法を口よりして
廿四の百少使へ行ふのは縁切をせぬはる
くぬとまの二の習儀もさうせしむる事とす
極高性その

○支那の結婚の法は新婦をお母と共々二三日
所へ行ふことを許さぬ事あり使立も母と共
に姉と共々ありしむる法を口よりして
廿四の百少使へ行ふのは縁切をせぬはる
くぬとまの二の習儀もさうせしむる事とす
極高性その
みと共々此の流儀の母の中へ感心する事と
内言えりある事とす
ししきささるりのある。例へば村の二の親を
申の村の二の感心の事あり使立も母と共
に姉と共々ありしむる法を口よりして
廿四の百少使へ行ふのは縁切をせぬはる
くぬとまの二の習儀もさうせしむる事とす
極高性その
切りくせりし事の中へ縁切をせぬはる
くぬとまの二の習儀もさうせしむる事とす
極高性その

あすしとくえんを魂とくく誌志し徳を
日と出くこのあまを子於式もこ、りりて
言つた物まんりともあへまひある

○羅振母王、叔蘊と邦より清和現代筆名の大家
篆刻をよきう又筆名を花と太に字を
今を農字を也此書は、以て本邦の古き
と祝祭のたると来り、佛に夏節休業のゆ
し早稲田のたると也併し字長ともな
全はもたるとくく思ひつち物
恒とくはり一の一夕集前に記載しこ

申入る羅氏西下の日切迫りたを以て字を
し出るありの午前早稲田の来り、余固書
よとゆく古物をもくく約三の可話話を交
也、羅氏年歳五十二才と幹清庵度、溫和
一と品格もくく人也羅氏余の好くく喜
而并に楹聯を以てくく歎、文のくく紅
こんと余の邦也、聯をくく「清風清聖
聖」今月今人七月七人共の書、流花
書もくく羅氏云く余日本もくく
の固書をぬく改を甚に字とくく希く一見

を許す七金回く脚を花せしむるあしう凡んを七表の
ゆき大分路の圖書の本家本元なる者四人に示
すことき尤も一七二二あるありと金阜上は排
別する二三の書を出して回く是れ皆五珠とす
福のこのうらうらうはく青い表の宛り依りて
疑義を質さんひる也羅氏巻子本皇侃義疏
よりて激賞措りて歎して回く是れ本圖に於て別
座る能りてこのと余問ふ業ある貴西の人の
否回く運業の撰抄を案するに確りて唐代契丹
人の筆とすよ又内家私印の印と見し回く

ん又より唐代の刀法と得たりと余回く我邦天
平末の葉より唐風を倣ふ印のことも唐風を帯ふ
るところありあやの如余又羅氏に示すに付あやを
ら能く示す羅氏に云く此の字宛りてる来り
一二萬回と経たり宛りて此宛りのこと一年強
歎後ありて未に見おと宋本及刻本山版北朝
之集業檀版古書韻合を示す羅氏に云くこん代
の本圖に亡びて又も得ざる所のことも也と又日向
宛に碑(倭寇碑)拓本を出し試み其時代を
問ふ羅氏に云く是くして回く是れ唐代のもの也

捺り稀観のしもの属すと云ふ金石不傳の羅
 氏案此の瓦語(日本)の字ありて其の余の羅
 氏案の古瓦板本を獲んと然して未獲す此
 一の書物ありと云ふ余の稀観の他り傳の
 二君の稀観の羅氏に叩謝君又法正の筆を
 りぬる所のしもの字は遠く筆名と見ゆ
 羅氏又近年法正歸化城の多く筆名と見ゆ
 するしと云ふ而して印譜の字も其の吳武
 芬書雲天蓋書并齊志の古印摺正統の
 土物にありけ余のしもの余の字と見ゆし其

のし稀観の心は印譜を出し三才羅氏に在也
 前の二印譜を既に研鑽しはぬし其の道境を
 人と余退す印譜を出し羅氏に其の四起書
 くありやと問ふ曰く本圖に於て稀観の
 みの属すと云ふ

此日暑熱殊々甚しと驟雨の到る羅氏
 意を中絶し法流二の字を貴す日法流の
 書名ありと一説し紀念帳に一書しとのこ
 して去る

明治四十二年八月考

大名がおもいおろしにせん島寺
役人の子はにぎしと能くま
手をつけし時も手をゆるめ
人にたれおやにさく下平う
ままをひき一理をよめはる
ぶつつけるやうに習はせし
容のあまなむししうる人
島も行ふぬらふ河原のさ
寐をそそも固扇の動く乾ころ

女郎買子とを親父は死なせし
 又おちあろうと腹を五七のこし
 を乳乳と桐の鯛が端をのま
 義のつよいぬと取つて幾うさし
 女房の成ちるも後きめさか
 ころめぬ男のめはぬと又せ
 指はさうかそとをう既に悟れ
 台換ふあうあう此けの氣を
 悠勤やそのか悟れぬと
 子心くまん洲のまらうに
 後きめさか

せんのお子しは毒を
 三味線心からくおと母の
 泣きし中をこせくばしに念
 代脈のちとる互はしに
 荒死にとすいと悔やれ念を
 うけ出され行つに先るも又
 かみまうのなる柏子と後
 孝行い受らん不孝と
 あきまくりよとて故う起し者

娘をいふに客を重くおぼ
 助六は江戸にいらぬ人の返書
 ほとお思儀鼻麻草うんおしとま
 又ぬめはん惚んる物なるの工用干
 逆船のやうな内室をええんのこと
 次男ととへ口く武ある懸斗を付
 張物といけらうるにこらふ
 咬いふしの自慢しるうらぬ外が
 葉花のよきはこつちのヤトが減
 志からんた下女様三の姫やうせい

田山大迂
周
鉢
印

門人
半迂

山未回中
官能私能

吳武芬
安平
吳武芬

香島古
中
備
印

直歸化城
多古私能

印人

片刀
中鋒

印刀

國書刊行會

國書刊行會

以下全て

白紙

